



竹葉石膏湯 (ちくようせっこうとう)

【処方コンセプト】 風邪の後に、いつまでも残るしつこい咳に。

発熱後、熱は下がったけれど咳だけが残る今ひとつ体調が良くない。原因は、体の奥に残っている熱です。この熱が体を潤す体液を減らすことにより、体の中は乾燥してきます。その結果、気管支が乾燥し、敏感になり、炎症を起こし、少しの刺激で咳が出やすくなってしまいます。竹葉石膏湯は体液を増やし気管支を潤して、炎症を鎮め、風邪の後にいつまでも残るしつこい咳を鎮めます。

◆出典の『傷寒論』『差後労復』には「傷寒、解する後、虚羸（キョリ）、少気、気逆、吐せんと欲する者、竹葉石膏湯之を主る」とあり、急性疾患の回復期に現れてくる、咳や息切れ、疲労感に使用することがわかる。

虚羸：やせ細っている状態 少気：呼吸が短く、弱い 気逆：咳、のぼせなどの症状

◆咳は大きく乾性の咳と湿性の咳の2つに分けることができる。



乾性の咳の特徴 (竹葉石膏湯タイプ)

- ①顔を真っ赤にして激しく咳込む。
- ②痰の量は少なく、粘く切れにくい。
- ③喉が渇いたり、詰まったりなどの違和感がある。

湿性の咳の特徴 (小青竜湯タイプ)

- ①痰はサラサラしていて無色、量が多い。
- ②鼻閉を伴うことが多い。

◆竹葉石膏湯は麦門冬湯の加減方でもある。

麦門冬湯ベースで考えると乾性の咳に使用する。

その際は麦門冬湯より口渇、口中や唇の乾き、汗をよくかくなどの熱症状が強いことを目標とする。

【処方構成】7味

本方は麦門冬湯から大棗(タイソウ)を去り、竹葉(チクヨウ)、石膏(セッコウ)を加えたもの。竹葉、石膏は共に寒性の性質があり熱を冷ます。竹葉には清熱の働きの他に上衝する気を引き下げる働きがあり、石膏には清熱、消炎、口渇を改善する働きがある。また竹葉は石膏の補助として、熱性疾患後期の余熱を冷ますのに用いる。竹葉石膏湯は、気道を潤して、炎症を鎮める構成になっている。

チクヨウ — 清熱除煩

ハンゲ — 止咳化痰

セッコウ — 清熱瀉火

バクモンドウ — 潤肺化痰

益気生津
ニンジン
コウベイ
カンゾウ

	解表	清熱	滋陰	理気	補気	固 化	配 合
--	----	----	----	----	----	--------	--------

	麻黄	生姜	桂皮	細辛	前胡	黄柏	竹葉	石膏	知母	麦門冬	天門冬	地黄	芍藥	当歸	陳皮	半夏	厚朴	人参	粳米	甘草	大棗	白朮	五味子	紫蘇子	生薬数
竹葉石膏湯							○	○		○						○		○	○	○					7
麦門冬湯										○						○		○	○	○	○				6
蘇子降気湯		○	○		○									○	○	○				○	○			○	10
滋陰降火湯						○			○	○	○	○	○	○	○					○		○			10
小青竜湯	○	乾	○	○										○						○			○		8

処方名	類方鑑別
竹葉石膏湯	麦門冬湯の使い方に似ているが、より口の中などの乾燥感や炎症が強いものに。
麦門冬湯	少量の粘っこい痰が出て、咳が出ると止まらず顔を真っ赤にするようなものに。声枯れにも使用できる。
蘇子降気湯	呼吸困難を強く訴え、ノドが塞がりむせて、下半身が冷えるものに。
滋陰降火湯	老化や慢性疾患などで、皮膚がカサカサして、常に咳が出るものに。このタイプは便秘を伴うこともある。
小青竜湯	風邪やアレルギーによる咳、水様性の痰・鼻汁などを目標に。